

日本歴史の大欠陥

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず
大石 久和



今回は、話題をガラッと変えて、日本歴史学の大問題を紹介したい。これも国土とわれわれの暮らしとの関わりを説くという国土学の一ジャンルだからである。

米の移動が極めて制限的であった江戸時代以前の社会では、飢饉が頻繁に起こっていた。今日では、例えば1993年の米の大不作の年には東南アジア諸国から緊急に米を輸入したりして米不足に伴う混乱を防ぐことができています。

しかし、昔は輸入など考えられないし、米の不作の時ほど領主は米の流出を制限したから、飢饉が生じた地方では飢えによる悲惨な状況が出現することとなったのである。その様子は方丈記に具体的に記録されている。

鴨長明が経験した飢饉は、今日では「養和(1181年)の飢饉」として記録されているもので、京の町に死臭が漂っていたことや、鴨川には人が通行できないくらいに死んだ人間や動物が積み上がっている様子を見聞した人だけが書ける精度で記録している。

あるお坊さんが、人の額に阿弥陀仏の「阿」という字を書いて、仏縁を結ばせようとしたところ、京の都の限定された区域と期間でも42,300人を超える死人に出会ったと記している。このような悲惨な経験をしなくていい時代を心から喜びたい。慶応2年(1866)の飢饉を最後に、ありがたいことに日本から飢饉はなくなったが、記録されている飢饉は歴史全体を通じて22回にもなる。

産経新聞出版社から出版した「国土が日本人の謎を解く」の中でも紹介したのだが、歴史学が説明できていないことの一つに、「御成敗式目制定の謎」がある。歴史の解説書は、制定の時期の背景について、まったく理解できてないという問題である。

この式目制定の背景として大飢饉があったことに歴史書が触れていないことでも明らかのように、日本の歴史学は、所詮、文献学であり政治闘争史でしかないことがわかるのだ。

山川出版社の「詳説日本史」には、式目制定について概略次のように記している。

「当時道理(武士たちが育んできた慣習や道徳)と呼ばれたものは、種々の事情に基づいて長い年月を経て定着したものだったから、地域によって異なったり、整合性のないものであったりした。

そのため武士の土地支配が進展して所領問題が全国各地で頻発するようになると、幕府は明確な判断の基準を定める必要に迫られた。」

そこで、北条泰時は、貞永元年(1232)に御成敗式目を定めたというシナリオを提示しているのだが、本当にそうなのか。なぜ、1232年貞永元年なのか。

ところで鎌倉幕府の成立については、最近、いろいろな説が唱えられている。

1180年 頼朝が鎌倉に居を構えたとき

1183年 頼朝の東国支配が朝廷から事実上の承認を受けたとき

1185年 幕府が守護・地頭の任命権を獲得したとき

1192年 頼朝が征夷大將軍に任じられたとき

どの時期をとっても、御成敗式目の制定時期は幕府の土地支配が浸透し始めてからずいぶん時間が経っている。武家の支配開始によって所領問題が頻発するのなら、もっと早い時期に始まっているはずではないのかと「詳説日本史」の説明に疑問があるのだ。

「詳説」は全く触れていないが、実はこの時代は大飢饉が相次いだ時代だったのだ。貞永の前の年号は「寛喜」であるが、これはその前の「安貞時代」の飢饉を忌み嫌って1229年に寛喜と改元したものだった。

ところが、改元したにもかかわらず寛喜の時代は、安貞時代を上回る大飢饉時代となったのである。この1230年から翌年に及んだ飢饉は、今日「寛喜の飢饉」と呼ばれ、歴史上最大規模の飢饉だった。現在の岐阜県大垣市や埼玉県入間市などでは、今日の暦の7月に雪が降るなど、大変な異常気象だったのだ。

餓死者の多さは「天下の人種三分の一失す」と語られたほどであった。日本中に屍臭が漂ったと言っても過言ではない状況が生まれたのである。せっかく寛喜としたのにこの有様だから、またまた改元することとして1232年には「貞永」としたのだ。

この飢饉による社会混乱と米の争奪をめぐる紛争多発が、御成敗式目の制定を必然としたのだ。この史上最大規模の飢饉に触れようとしてもしない歴史書は何のために書かれたのだろう。このようなことで人々は歴史書から何か学ぶことができるのだろうか。

現在のわれわれ日本人の気分は、東日本大震災やその前の阪神淡路大震災に大きく左右されている。無常観のようなものが、今の日本に大きく流れている。貧困化が進むこの国で、多くの人が現状の生活に満足と答えているのも、あり得もしない財政破綻論とともに

災害多発が「何をしても詮ないこと」といった気分を蔓延させているからではないか。

江戸末期の安政時代もすさまじいほどの大災害頻発期だった。大災害が頻発した安政の時代に、人々が動揺しなかったわけがない。この時代の人々の動揺エネルギーが時代の歯車を動かしたのだ。にもかかわらず、大河ドラマは江戸大地震には少し触れていたが、安政期の東海地震や南海地震など他の災害には何の関心も払っていない。

気象や自然の大きな揺らぎが歴史を変えていくのである。このような厳しい災害や疫病の被災や被害の経験が、長く続いてきた武家時代の終わりを人々に予感させたのだ。

さらに、明治維新へと続く幕末の騒動の中で、歴史学が説明できていないことがある。それは、なぜ西南諸藩が倒幕へと動き、東北諸藩が佐幕側に立ったのかということである。

何か必然があったに違いないのだが、それは何なのか。このことに説明仮説の提出ができていないのは、筆者の知る限り歴史学者でもない東京大学大学院物理学課程を修了した板倉聖宣氏（『日本史再発見』・理系の視点から）朝日選書・1993年）が唯一である。

彼は徳川吉宗の1721年の世界初となる全国人口調査から、幕末にかけての人口増減の地域的偏りを調べたのだ。総人口はほぼ3,000万人で変わらなかったものの、まるめた言い方だが、西南諸藩ではかなりの人口増加があり、北関東から東北諸藩では人口減少に苦しんでいたことがわかったのである。

幕藩体制が窮屈に感じられるようになった西南地方と、幕藩体制にしがみつくしかない東北地方との戦いが戊辰戦争だったのである。板倉氏の著作から長い年月が経つが、歴史学は歴史が専門ではない人の説を無視したままとなっている。

（本稿は、筆者が「表現者クライテリオン」に最近執筆したものをベースとしている）